

～しらさぎ・小淀 ICT 化計画の巻～

2021. 12. 15



ICT (information and communication technology) とは、通信技術を使って、人とインターネット、人と人が繋がる技術のことです。

合言葉は・・・

I・・・いい (良い)

C・・・ケア

T・・・繋げよう (提供しよう)

介護現場における 生産性向上の捉え方

生産性の向上は、様々な業務改善を行い、介護サービスの質の向上に繋げていくものと考えられますが、その手段として業務改善の中で ICT 化を図り、文書作成等の効率化から利用者への直接処遇の時間を十分に確保すること、データ蓄積によるエビデンスに基づく介護サービスの提供ができるようになること等が挙げられます。

現在、中野区福祉サービス事業団では、しらさぎホーム・小淀ホームにおけるデジタル環境の整備と ICT 機器の導入に向けた計画を進捗させています。

ICT 機器導入の目的は、『生産性の向上』です。生産性の向上が求められる背景には、今後の人口構造の推移を見ると、高齢者の急増と生産年齢人口減少時代の到来が予測され、これに伴う介護ニーズの急増と介護人材の不足が考えられ、喫緊の重点課題となっています。

この重点課題の方策の一つとして、「ロボット・センサー・ICT の活用」が介護サービス事業における生産性向上に資するガイドライン (厚労省) にも挙げられています。

私たちは、これまでも介護人材確保策として、技能実習生を始めとした外国人介護従事者の受入れ等をすすめてきましたが、次なる取り組みとして、ICT 機器導入計画を立案し、進捗させています。





業務負担の軽減と効率化

Wi-Fi 環境の敷設やナースコールシステムの更新等、デジタル環境の整備を行うことで各 ICT 機器（見守り機器・ナースコールシステム・介護ソフト・タブレット端末など）の連動とタブレット端末での情報集約、転記作業の回避等により業務負担の軽減と効率化を図ります。

また、業務改善については、ICT 機器導入以外にも、職場環境の整備、業務の明確化と役割分担、手順書の作成、記録・情報共有方法の工夫、OJT の仕組み作り等の業務改善活動も大切になってきます。

ICT 機器の導入で 期待する効果

～働きやすい職場づくり～

科学的介護の実現

導入する見守り機器と記録用介護ソフトとの連動により、一部のバイタル値や睡眠状況等の利用者情報を一元管理することで、エビデンス（根拠）に基づいた科学的な介護サービスの実践を実現していきます。

また、集積した身体状況・栄養状態・口腔嚥下機能・認知症のデータ等を科学的介護情報システム「LIFE」に定期的に提出し、フィードバックを受け、それに基づき支援のあり方を検討、ケアプラン等にも反映し、PDCA サイクルの推進からケアの質の向上を目指します。

コミュニケーションの活性化

Wi-Fi 環境の敷設により、タブレット端末等を活用したオンライン会議・ミーティング等を開催、施設内に限らず施設間での実施も随時可能とし、コミュニケーションの活性化を図ります。

職員の定着と人材の確保

ICT 機器導入によるムリ・ムラ・ムダを削減、業務負担の軽減と効率化により、残業の削減、自己啓発の推進、有休取得率の向上等、働きやすい職場の実現と職員の定着・確保に繋がっていきます。

ICT 機器導入の一例



見守り支援システム

バイオシルバー社製『aams』を導入予定。専用センサーマットや見守りカメラを使用し、呼吸・心拍・体動・離床・睡眠状態をモニターで把握。また、他機器との連動により、介護ソフトでの読み取りやタブレット端末でのモニターの確認が可能。

自動転送式バイタル測定機器

Bluetooth 機能搭載型の電子体温計、電子血圧計、パルスオキシメーターのバイタル測定機器 3 機種を導入予定。その場で測定した値が即座に自動でタブレット端末または介護ソフト内に転送され、転記間違い防止や入力時間の削減を実現。



タブレット端末

タブレット端末を導入することで、場所を問わずにケアごとに記録し、電子記録で統一、記録した内容も介護ソフトに自動転送することが可能。また、見守り支援機器とナースコールシステムからの情報を画像等も含め一元管理することも可能。



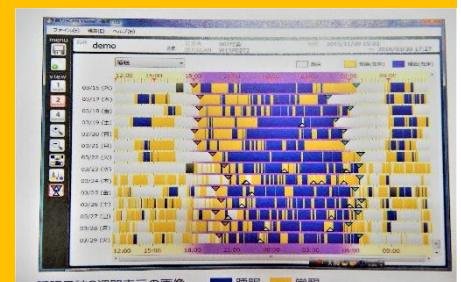
トピックス ～事例 その1 見守り支援システム導入～ (ある施設の取り組み事例)

課題

夜間の定期巡視（見守り）については、事故防止等の観点からもその頻度は高くなっており、度重なる訪室が、ご利用者の睡眠の妨げや職員の身体的・精神的負担にも繋がっている。また、睡眠状況等の夜間状況の把握についても感覚的であり、正確なデータとして管理出来ていなかった。

成果

- ・見守りシステムと PC・タブレット端末との連動により、訪室することなく、ご利用者の睡眠状況等を把握でき、職員の負担軽減とご利用者の安眠に繋げることができた。
- ・睡眠リズムの把握から、夜間の排泄ケアの見直しを個別に行えるようになった。また、睡眠導入剤を服用するご利用者の睡眠状況の報告を看護師や医師へ、より正確に行えるようになり、投薬の効果をより把握できるようになった。

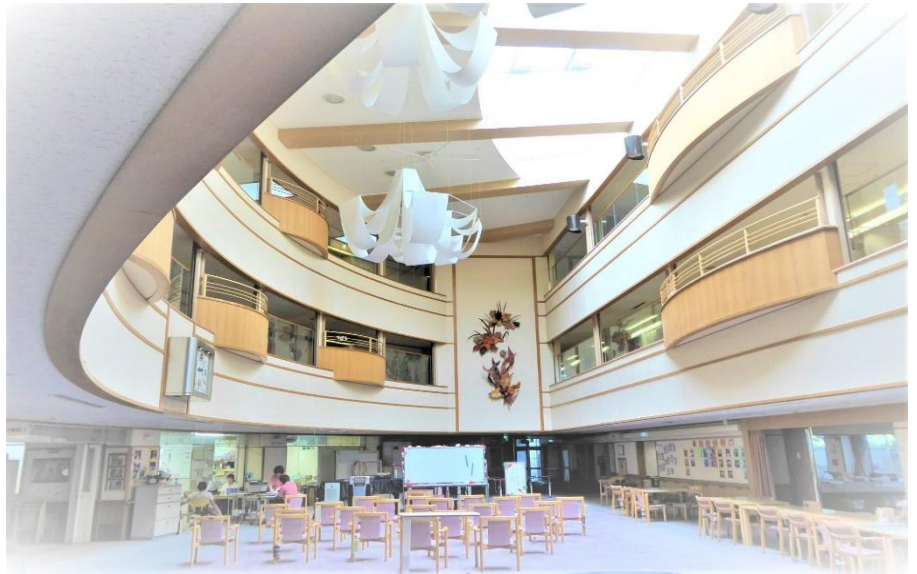


今回導入する主要機器は？

見守り支援システム

上記でもご紹介した見守り支援システムのバイオシルバー社製『aams』は、今回導入する ICT 機器の中でも主要な機器となります。

専用センサーマットをご利用者のベッドに設置することで、バイタルの一部や睡眠状態の把握、起居動作等を感知することを可能とし、これらを専用モニターで管理することができる。他、タブレット端末や見守りカメラとの連動から、ご利用者の様子をパソコンやタブレット端末でも確認することができ、業務負担の軽減と安全性の確保が期待されます。また、介護ソフトとの連動からも根拠に基づいた介護サービスの実践と科学的介護の実現にも期待ができます。



あくまで ICT 機器は手段

大切なことは、この機器を「私たちがどのようにして活用していくのか」ということです。介護サービスの質や生産性の向上等の効果を生み出すのは、ICT 機器自体が目的を果たしてくれるのではなく、私たちがサービスの繋ぎ手となり、通信や機器の特性をご利用者へのサービスに繋げていく必要があります。

また、機器の活用は継続性が重要です。機器導入後、その効果はすぐに現れるのではなく、一時的に生産性は低下すると言われていました。それは、機器の操作は慣れるまでに時間も要し、定着させていく為には、小さな成功例の積み重ねが大切だと言われているからです。その為根気よく使い続け、職員への教育とチームでの関わりが鍵と言えるでしょう。



トピックス ～事例 その2 タブレット端末の導入～ (ある施設の取り組み事例)



課題

記録業務については、パソコン（有線）がスタッフルームにあることから、事後の記録になり、職員の記憶に頼った記録となることから内容の抜け漏れとケア業務と記録業務の分断が発生し、時間外残業に繋がっていた。

成果

・タブレット端末を携帯することで、食事や排せつ支援の実績入力をその場で入力して介護ソフトに転送することを可能とし、ご利用者の見守り業務を欠くことなく記録業務を行えることから、記録内容の漏れの削減やご利用者とのコミュニケーション時間の確保にも繋げることができた。

・タブレット端末を各機器（見守り支援システム、ナースコールシステム、介護ソフトなど）と連動させることで、ご利用者の居室に訪室することなく状態確認することを可能とし、入力した記録を自動転送することにより転記業務を省ける等から、職員の負担軽減及び時間外残業の縮減についても効果が現れた。

